

開発の現場から

長期化するロヒンギャ避難民を抱えるバングラデッシュの苦難

小森 剛

国際協力機構

バングラデッシュ事務所次長

コックスバザール空港に降り立つと、まず目に飛び込んでくるのが数々のオートリキシャ。首都ダッカと異なり、自動車はそこまで多くはない。ロックダウンは終了したが、コロナ禍とは思えない人の多さであり、マスクをしていない人も多い。オートリキシャの間を抜けると、あっという間に青々とした水田が広がる。この先に避難民キャンプがあるのかと疑いたくなるほど、見た目はのどかであり、どこか日本を感じる懐かしい



オートリキシャ



ホスト・コミュニティの田園



避難民キャンプ



幹線道路から

風景である。次に現れるのは長い海岸線で、ここは世界一長いビーチと言われ 120～150km 続く。その後、山道に入りいくつかの丘を越えたところ、空港から 90 分程走ったところに、突如として、世界最大級と言われる避難民キャンプが現れる。

ここで「避難民」と呼ぶには理由がある。一般的には「難民」と呼ばれている。だが、バングラデッシュ政府は、彼らのことを難民と呼ぶことはなく、「移動を強いられたミャンマー国民 (FDMN もしくは Forcibly Displaced Myanmar Nationals)」と呼ぶ。これには様々な背景があると考えられているが、バングラデッシュが難民条約を批准していないことも背景の一つであると推測される。難民の解決には、自主帰還、第三国定住、庇護国における社会統合の3つあると言われる。バングラデッシュにとっては、3番目の社会統合が最大の問題となっている。最近、モメン外相も社会統合の可能性を否定している¹。社会統

¹ <https://www.dhakatribune.com/bangladesh/rohingya-crisis/2021/07/31/fm-momen-bangladesh-against-any-idea-leading-to-rohingya-integration>

合を認めることにより、更なる人々が国境を越えて来ることが懸念されるうえ、国民感情にも配慮する必要があるのであろう。ロヒンギヤの歴史や問題については多くの著書があるため、ここでは触れないこととする。バングラデシュ政府は、あくまで一時的な保護であるとの立場であり、ゆえに、避難民の人たちには、移動の自由や働く権利が認められていないのが現状である²。なお、難民の取り扱いについては、世界銀行が取りまとめようとしていた難民支援に係る文書について、社会統合や就労の自由などの観点からバングラデシュ政府が猛反対をして話題となった。国際社会では人道と開発のネクサスと言われて久しいが、アフリカなどの移民受け入れ国での成功例をバングラデシュで議論できる雰囲気にはないのが現実である。

歴史的な背景はさておき、避難民の規模も問題である。避難民キャンプには、現在 89.5 万人が暮らす。これは日本の都道府県の人口規模では、41 位の佐賀県（81 万人）よりも大きく、一方で、受け入れているホスト・コミュニティの人口が 47 万人程度なので、合わせて同 27 位の山口県（134 万人）の人口のうち 66%を避難民が占めている感覚である。想像していただきたい。コックスバザールの周辺地域は、バングラデシュの人たちにとって、砂浜が広がる憧れ（？）の観光地である。避難民のキャンプは海岸から離れてはいるが、そのような土地に政令指定都市規模の人々が押し寄せてきたのである。例えば、千葉県の長い海岸線で有名な九十九里浜周辺に、突然県庁所在地の千葉市の人口に匹敵する人々が外国から押し寄せてきたらどうだろうか。その人たちが生きるためではあるが、山々の木々を伐採していくし、中には犯罪者もいるかもしれない。武器やドラッグがホスト・コミュニティに流れる可能性もある。

コックスバザールの避難民キャンプの多くはウキアという地域にあるが、30～40km 南下したテクナフという地域にもキャンプが点在する。ウキアのキャンプは幹線道路からしばらく走ったところに所在するが、



ナフ川と対岸のミャンマー



ベンガル湾

テクナフのキャンプは幹線道路沿いであり、ホスト・コミュニティには、より避難民を身近に感じる可能性がある。また、避難民が超えてきたミャンマーとの国境にあるナフ川も眼下に広がる。

UNHCR によると、世界の難民の 85%は途上国が受け入れている。バングラデシュも、最近の成長は著しいが、途上国であることに変わりはなく、国内には貧困層も多く抱えている。ホスト・コミュニティへの影響は、環境の質の低下や公共サービスの低下などが言

² 過去に難民認定を受けた難民を除く。

われるが、バングラデシュも例外ではなく、他にも物価の上昇、賃金の低下、ナフ川の禁漁に伴う家計への影響など数多く指摘されている。このようなホスト・コミュニティへの悪影響や、また、避難民キャンプでの犯罪など様々な懸念がありつつも、バングラデシュ政府は、拒絶することではなく、大量の避難民を受け入れることを決め、国連や各国の支援も得つつ4年以上も受け入れを継続している。また、一般のバングラデシュ国民も住居や物資の提供をするなどしたと聞いている。ムスリムの教えによるものに加え、1971年の独立戦争時にインドに逃れた経験も大きく作用していると考えられる。なお、バングラデシュ政府は、避難民が帰還することを前提としているため、あくまでも一時的なものとして支援を行ってきたが、その中でも目を引くものが、バシヤンチャール（Bhasan Char）島である。

避難民キャンプがあるコックスバザールから120kmほど北上すると、バングラデシュ第二の都市であるチョットグラム（チッタゴン）があり、そこからベンガル湾を西に30～40kmほどのところにある島である。面積は53 km²ほどで、比較が難しいが、足立区（53.25 km²）とほぼ同じで、江戸川区や（49.90 km²）練馬区（48.08 km²）よりも大きく、世田谷区（58.05 km²）よりも小さい。琵琶湖と比べられるかと思っただが、大きすぎた（669 km²）。話題が離れてしまうが、各区の面積を調べるまで認識してなかったのだが、区や市の境界が決まっていないことが結構多いようで面白い。ちなみに江戸川区は市川市及び浦安市との境界が決まっていならしく、東京ディズニーランドと臨海公園の間にある旧江戸川の途中で Google Map 上も境界が記載されていない。



さて、話を戻そう。バシヤンチャール島がなぜ目を引くのか。その足立区ほどの大きさの島に10万人の避難民を移転させる計画があり、バングラデシュ政府は400億円近くとも言われる自国予算を投じて避難民の居住環境を整備してきており、すでに2万人程度の人々が移転していると言われているからである。正確な移転人数が分かっていないのは、国連がその移転には関わっていなかったからである。バシヤンチャール島については、良いイメージを抱かない方も多いかもしい。バシヤンチャールとは、ベンガル語で浮く島という意味であり、人が住む島としては名前のイメージは良くない。

そのバシヤンチャール島について、今年の10月に大きな動きがあった。国連が同島で活動するための枠組を定めるための覚書（MOU）が締結されたのである。当初、国連は、

バングラデシュ政府が進める避難民の移転に関して、防災面など居住の適切性や自発的移転などについて疑問を示しており、国連を通じた支援を行ってきている各国も様子見状態であった。一方で避難民の移転は続いていることもあり、今年に入り国連の調査チームが現地入りするなどし、最終的に UNHCR が国連機関を代表して MOU を締結するに至っている。MOU 締結直後から、UNHCR や WFP がバシアンチャール島入りし、すでに移転した人々のニーズ調査などを開始し、今後の支援計画策定の準備を行っている。一方で、バングラデシュ政府は早急な移転を推進しており、これを書いている間にも 400 人近い避難民が島に到着し、更に数千人が渡航を待っているという記事が出ていた。避難民キャンプでの犯罪が増えており、そのようなことも移転を促進させているのかもしれない。同島への支援については、まずは国連による調査や調整が行われた上で本格化することになる。

日本政府によるコックスバザールの避難民キャンプ向けの支援については、UNHCR などの国際機関を通じたものが多い。シェルター、保健・給水施設の整備、E バウチャーを通



看護師向けの資機材



整備された県病院

じた食糧支援など多彩であり、またホスト・コミュニティ向けの支援も行っている。一方で、国際協力機構（JICA）は、避難民にも裨益し得るホスト・コミュニティ向けの支援を中心に行っている。これは、バングラデシュ政府の、同国向けの協力は自国の開発に使われるべきとの考えを反映している。多くは既存の事業を最大限に活用している。例えば、看護プロジェクトを通じて、キャンプに派遣される予定の数百名の看護師に向けて派遣前研修や資機材を支援した。また、避難民キャンプの保健施設では専門的な治療ができず、そこで対応できない患者は県の病院に送られることになることから、同病院の資機材整備を支援することで、避難民とホスト・コミュニティ双方に活用可能となっている。また、禁漁などの影響に対しては漁村振興の支援も始まったところである。このように、受け入れ国の意向に配慮しつつ、それぞれの機関の強みを生かしつつ支援が続いている。

ミャンマー情勢により、避難民の帰還のめどが全く立たない中で、バングラデシュ政府の努力は続いている。一方で、アフガニスタン情勢、新型コロナウイルスの変異株の出現など新たな話題にこの問題がかき消され関心が失われてきており、それに伴い国際的な支援も減少することが懸念されている。避難民のストレスやフラストレーションは相当高まっており、特に若者が麻薬や犯罪に手を染め、また、テロ組織に加担するなどしないか心配である。問題の長期化に対応しつつ、このようなフラストレーション解消にも配慮した支援が必要になっている。国際社会がバングラデシュ政府の努力を評価し、これまで以上の支援が行われることを期待したい。